

静岡県試験研究 10 大トピックス（農林技術研究所）

タイトル	凍霜害に対応可能な事後対策技術を確立	研究期間	平成 22 年度（単年度）
研究所 所属	農林技術研究所 茶業研究センター	補職名	上席研究員
		研究者名	鈴木利和
		問合せ先	0548-27-2884
研 究 概 要	<p>[背景・ねらい]</p> <p>静岡県では、平成 22 年 3 月の凍霜害の影響で 45 億円もの甚大な被害を受けた。そこで、茶業研究センターでは、凍霜害を受けた茶園において、被害程度別にその後の整せん枝等の栽培管理が茶芽の生育と収量に及ぼす影響を明らかにすることにより、凍霜害を最小限におさえることのできる事後対策技術を確立し、今後の茶生産の経営安定につなげることを目的として試験を行った。</p>		
	<p>[成果の内容・特徴]</p> <p>1. 被害茶園における被害直後のせん枝方法を明らかにした。</p> <p>被害の甚大な茶園（株面から 2～3 節程度下の深部にまで枯死芽が見られる茶園では、株面を前年秋整枝位置から 1cm 下で刈り落とす（せん枝する）ことにより、生育良好な再生芽の伸長を促し、一番茶収量が増加する（図 1, 2, 3）。</p>		
	<p>2. 被害茶園では一番茶の生育が極めて不揃いになるため、摘採時に茶刈り刃で切断されず摘採後に下から伸長してくる遅れ芽が多発する。この遅れ芽の二番茶への混入を防止するための適切な整枝処理（遅れ芽除去）の方法を明らかにした。</p> <p>一番茶摘採の概ね 10 日後と 20 日後頃に、2 回の整枝を行うことで、二番茶芽の生育が促進され、収量が増加する（図 4）。</p>		
	<p>[成果の活用面・留意点]</p> <p>1. 生育初期（萌芽から 2 葉開葉期）に凍霜害を受けた茶園に適用する。</p> <p>2. 被害が中程度（株面から 1 節程度下まで枯死芽が見られる茶園）または軽微な茶園では、従来の指針通りに、せん枝を行わずそのままにしておくのが適切である。</p> <p>3. 研究成果は、迅速に関係団体、農家へ情報提供するとともに、「平成 22 年度凍霜害対策指針」として取りまとめた。</p> <p>4. 上記以外の事後対策技術については、「2010 年 3 月 30 日茶凍霜害対策資料集（2011 年、静岡県経済産業部）」を参考とする。</p>		



図1 被害が甚大な茶園におけるせん枝処理の位置
(写真は被害1週間後)

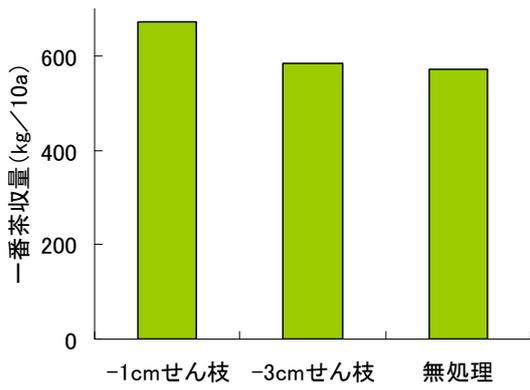


図2 せん枝の深さが一番茶収量に及ぼす影響

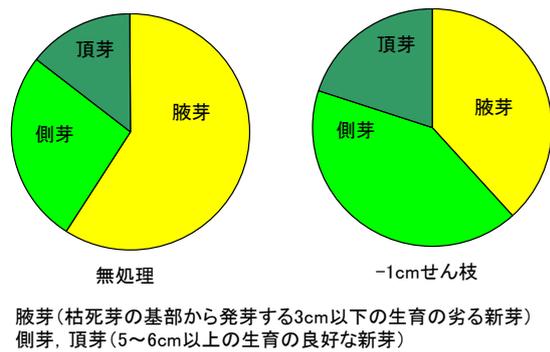


図3 せん枝が新芽重の形態別構成割合に及ぼす影響

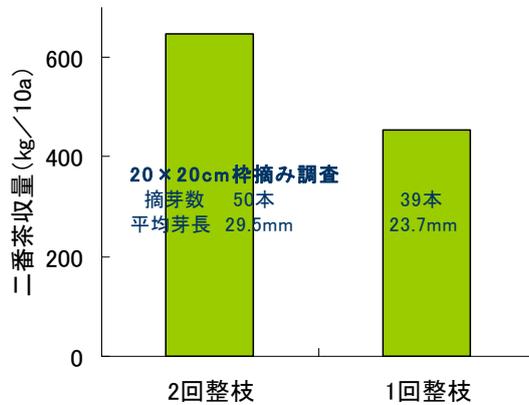


図4 一番茶後の整枝方法が二番茶収量に及ぼす影響